

二千十五年の夏。花火大会の当日、見物客が誰もいないのにも関わらず、夜空には無数の花火が打ち上げられていた。豪快な音が夜空に響き、河川敷には静寂が流れる。

私は夏のために買った浴衣を着ながら、アパートの裏庭で一人、花火をしていた。夜空には大きな花火がドン！ ドン！ と打ち上げられる。

二十五歳。もう女の子と呼べる年ではないけど、まだ女だった。なぜ私は花火大会の日に、一人で花火をしていたのだろうか。それは考えてみるとある程度は予想出来そうな事であり、どう考えても理解できない出来事だった。

そう、あの日はアパートの外壁に背を預けてぼんやり夜空を眺め、手元の花火なんかロクに見ちゃいなかった。正面には民家との境界線となっている金網。外壁と金網の間にぽっかり空いたスペースに座り込み、札幌の涼しい風を肌を感じ、どっからともなく聞こえる虫の声を聞き流し、ああ夏だという感慨にふけり、線香花火を無駄に消化して、そして。

確かに色とりどりの花火が夜空に咲いていた。もちろんこの花火を見ているのは世界でたった一人、私だけ。

何度も思う。どうして私は一人で打ち上げ花火を見ながら、線香花火をするに至ったんだろう？

高校を卒業した後、私は専門学校に通ってウェブデザインの勉強をして、デザインだろうとプログラムだろうとたった二年学校に通っただけでは、そういうモノにならない事を知った。若かった。マジで私は若かった。

だからダメ元で高級ホテルの受付嬢の面接を受けた。なんか知らないけど受かった。後で噂に聞いた所によると、顔で採用されたらしい。二年間お勉強した時間と親に出してもらったお金は無駄だった。

でも今年の六月で仕事は辞めた。理由は分からない。ただなんとなく、日々がむなしかった。自分でも分からないけどとにかく少しの間休んで、新しい仕事をしたいとかそんな事をぐだぐだ思い続け、大切な友達の結婚式に行つて何か踏ん切りが付き、「辞めますさようなら」の一言を口に出来た。

昔だったら人生の充電期間とかほざいて一定期間仕事をせず遊びまくり、また働き出すような人はいたのかもしれないけど、つくづくこのご時世に私はマジでイカれてると思ったね。でも、なんだかこれ以上仕事を続ける気が沸かなかった。

仕事を辞める前から夏を満喫しようと思っていた。人生最後の夏休み。遊びたかっただけなのかどうかは分からない。でも、なんとなく心の中で思ってた。楽しくても退屈でも良いから、夏休みという学生時代だけに与えられる特権を、

また手に入れたい、謳歌してみたいと。

そんなこんなで六月は家で小説を読んだり漫画を読んだりして自由の時間を満喫していたけど、ある日悲しい事件が起きた。

私は自転車に乗ってスーパーへ出かけていた。車は売った。最近使ってなかったし、維持費大変だからもういいやって思った。そう、車を売った事も事件だ。奈々のCDがオリコン六位になりテレビで彼女が水着姿で歌っているPVが流れ、夏海が教師としての職務に追われている中、私は自転車に乗って駆けていく子供達と同じように何の変哲もない自転車に乗っている。そしてスーパーで食材を買い、せっせとお小遣い稼ぎをしているアルバイトの高校生店員から、百八十二円のお釣りを受け取っている。

職なしの二十五歳は大人とは言えない。そしてバイトをしている高校生以下の存在。

ああ、職なしってこんなに辛いのか。ちょっと仕事を休んで充電期間？ アホか。あと四十年早いわ。

なんか私マジやばいかもーとか考えながら近くに公園に行き、ベンチに座ってスーパーで買った六十五円の缶コーヒーを飲み、タバコを吹かした。

すると隣の部屋に住んでいる裕太という小学三年生の男の子が「わー！」と嬌声をあげながら走り寄ってきた。

「可奈子ー！ こんなところで何してんだー！？」

「おう。見りや分かるだろ。クソみてえな夏を満喫してんだよ」

「可奈子相変わらずだなー！」

裕太は左手にグローブをはめて、右手にはボールを持っていた。辺りを見回しても公園には私と裕太しかいない。

「……お前、一人で遊んでんのか？」

言ってからやばい、って思った。裕太は多分友達がいらない。いつも一人で遊んでいるし、今だって一人だ。

「え？ あー、まあ、うん」

「……相手してやろうか」

「えっ。可奈子野球出来んの？」

「高校時代は帰宅部で、体育祭では毎年百メートル走のアンカーだった。才能の全てが運動神経に傾いちゃったんだ」

「へえ。……あ、でも。ねえ可奈子」

「なに」

「野球も良いけどさ、花火がしたいな」

「花火？」

「うん、花火」

職なしの二十五歳の女が、友達の居ない小学三年生の男の子と一緒に花火。考えただけで哀愁漂う光景。

「…あのさ、この際ハッキリ言うけど、お前友達は？」

ずっと笑顔だった裕太の顔が引きつった。そして無理した笑みを作る。

「い、いないよ。いないけど、別に気にしてない。一人でも楽しいよ！」

「一人でも楽しい、か。じゃあなんで私を花火に誘ったの？」

「それは…」

「なに、もしかしてヤリ目的？ 私の股狙ってんの？」

「ヤリ？ 股？」

「ごめん。大人になるとジョークがゲスになる」

「…花火、ダメなの？」

私は缶コーヒを飲み干して、タバコを裕太に向けた。

「吸うか？」

「前から思ってたけど、可奈子ってなんか、大人としてどうかと思う」

「…いいよ。花火も私が買ってやる。いつがいいの？」

「えっと…。来週の日曜日？」

来週の日曜日。何か引かかる…。日曜日…そう、来週の日曜日は豊平

川の花火大会の日だ。

「来週の日曜ってそれ花火大会の日じゃん。なんでわざわざその日なの？」

「だから、その日に花火やりたいの！」

「花火大会は親と一緒に行って、花火は別の日にすればいいでしょ？」

「嫌だ！ 花火大会なんて行きたくない！」

なんだコイツ。とか思ったけどなんとなく理由は察する事ができた。多分ク

ラスの子達が友達同士と一緒に花火大会に行くんだろう。でも当然裕太は誘っ

てもらえなかった。

裕太が親と一緒に花火大会に行って、その子達と遭遇したらどうなる？ 赤

っ恥。

だから裕太は意地を張ってるんだ。そして自分が花火大会の日、「年上のお姉さんと花火をしていた」という思い出で対抗しようとしている。考え過ぎかもしれないけど、そんな所だろうと勝手に決めつける。ああ、大人の悪い癖だ。

「…まあいいや。どうせ花火大会行く予定なんか無かったし。じゃあその日ね。詳しい事は近くなったら決めよう」

「マジ？ ありがとう可奈子！」

裕太はわーっとまた嬌声をあげて抱きついてきた。私はタバコを啜えながら

裕太の頭を撫でた。今頃世間の二十五歳は何をやっているんだろう。考えなくても分かる。

空を見上げて、公園を見渡し、うだるような暑さに嫌悪を抱く。そして花火をしている自分の姿を思い浮かべてあぁ夏だなんて思う。

最近気づいた。夏を感じるにあたって必要なのは青空でもなく太陽でもなく蝉の声でもなく、カレンダーだ。日付を見るだけで夏だって思える。夏ってすげえ。

私は花火大会の日に、小学生と一緒に花火をやる。これはとてつもなく大きな事件だ。表から見れば微笑ましい光景になるかもしれないけど、どう考えても反社会的行動だろう。

数日後。また事件が起きた。私の親友に千瀬奈々って奴がいてまあそいつはアイドル？ みたいな事やってるんだけど、こいつが発売したCDがオリコンチャートで六位に入ったのだ。

私はランキングが発表された三日後、千瀬奈々と出会った。もう一人の親友、笠原夏海も一緒に。

たまたま三人とも空いてる時間が一致したから集まろうって事になったんだ。そして私達はとりあえずカフェに集まり、円形のテーブルを囲った。私の正面に奈々。右側に夏海が座っていた。そして琴別高校で国語の教師をやっている夏海が、茶色の地味なカバンの中から奈々のCDを取り出してテーブルに置いた。

「オリコン六位おめでとう！ CDが売れない時代にアイドルやってて良かったな。ほら、サイン書け」

黒色のカットソーに白色のふりふりのスカート姿の奈々は、アイドルらしくない嫌味ついたらしい笑みを浮かべ、鼻で笑った。

「二十五でアイドルが務まるかよ。っーかサインってなに。生徒にお願いされたの？」

「生徒にお願いされてはいはいお前のサインもらう訳ねえだろ。オークションで売るんだよ」

私は爆笑した。そしてセブンスターの煙を大きく吐いた。店内は涼しく、さつきまで汗でべとべとしていた体からすうーっと熱が逃げ、体が冷えていく。この熱が拡散していく瞬間に、数少ない夏の心地よさを感じられる。

「いいね。私にも書いてよ。このオリコン六位のCDに」
「早く書けよ。六位のCDに」

奈々は眉間に皺を寄せ、指に挟んだタバコを口に咥えて私の顔に向けて吐き

出した。

「六位六位うつせえな。つーか売っても大した額にならねえって」

パツと見は大和撫子のような美人で、そこら辺にいる大物女優よりも整った顔立ち。色白。お肌は幼児並みにピチピチ。髪はさらさらストレート。胸は小さいけど足が長くスタイルも良い。歌もうまい。声は綺麗。でも残念ながら中身はガサツ。性格さえ大和撫子だったらパーフェクト超人になれたのに。

私はタバコを灰皿でもみ消し、素直な感想を述べた。

「いや、でも凄いよ奈々。まさか私らの中からこんな凄い奴が出てくるなんて思わなかったよ、うん。奈々は凄い。奈々最高！」

「はいありがとうございます」

奈々は夏海から受け取ったサインペンでCDのサインを書いた。奈々はちゃんと分かってる。夏海は本当に生徒からおねだりされたのだろう。こいつ日本語喋れねえんだ。

夏海は奈々からCDを受け取るとカバンに入れ、小さく笑った。

「人生、楽しそうだね。羨ましいよ」

私はつい眉間がピクっと動きそうになるのをこらえた。

人生、楽しそうだね。

ああ。

そんな言葉を屈託もなく出せるって事は、夏海、アンタもそこそこ人生楽しんでるって証拠だよ。

私はそんな事絶対に言えない。だって口にしたら、自分の心が一瞬でぶっ壊れる気がするから。

奈々は恥ずかしそうに頬を掻いた。

「……まあ、ね。別にこだわりなんか無いしさ、芸能人なんていつ辞めても良いと思ってるんだけど、少なくとも後悔はしてないかな。楽しくないって言うたら嘘になる」

そんなセリフを恥ずかしそうに言う奈々の姿を見て、私はいたたまれない気持ちになった。実はまだ仕事を辞めた事は伝えていない。ああ、奈々が人生を謳歌し仕事に明け暮れている間、私は何をしていた？ 家でお菓子食いながら映画鑑賞？

奈々はアイスコーヒーと一緒に頼んだカタラーナをフォークで突き刺した。そして口に放り込んで美味しそうにもぐもぐ食べる。その食べ方つーか仕草が子供っぽくて、なんだか可笑しかった。

「夏海先生はどうなの」

奈々がそう聞くと、夏海は面倒くさそうに頭を掻いた。

「別に。最近のガキはおとなしくて張り合いがなくてさ。みんな表では良い子ちゃん」

「ふうん。可奈子みたいな子はいないの？」

「いないね。昔の可奈子みたいに、いちいち先生に意見する奴は本当に減った。今の子供は心の中で呟いて鬱憤溜めるのが好きなんだ。DMだよなあ」

奈々がまたカタラーナを口に放り込み、じつと私を見てきた。聞かれたくない。可奈子はどう？ 仕事。そんなセリフ聞きたくない。いや自分の意志で仕事辞めたし後悔もしていないけど、なんだか惨めな気持ちになってきた。仕事の話なんかどうでもいいじゃん。しみつたれた話なんかどうでもいい。また子供の時みたいに、くだらない話で盛り上がるよ。

夏海がちらりと後ろの席に視線を向けた。舌打ち。体をぐいっと奈々に近づけて囁く。

「気付かれてるぞ」

確かに、店の奥に座っているカップルが好奇心むき出しの目でこっちを見ている。目の前にあの千瀬奈々が！ オリコン六位の千瀬奈々が！ 笑顔で、水着で、水しぶきを立たせているあのCDジャケットの千瀬奈々が、目の前でアイスコーヒーを飲んでいる！

「あ？ ああ、あの客か。クソうぜえな。しばくか」

私と夏海は立ち上がった。芸能活動ではぶりっ子して清纯している奈々の本性がバレたらとんでもない事になる。奈々の手を引っ張ると、やったらと不機嫌そうな顔になった。

「いいよ。気にすんなって」

「場所移そう」

今日は日曜日で店は混んでいる。騒がれると色々面倒だ。

奈々は洪々と立ち上がり、ぼそりと呟いた。

「……ごめん」

その後、私達は人目を避けて個室のある居酒屋に行った。酒でモヤモヤを消し去ろうと思ったけど、酒は進まなかった。

帰り際、奈々が思い出したように言った。

「今度さ、豊平川の花火大会行こうよ。時間空きそうなんだ」

私は舞い上がり、すぐに硬直した。

花火大会なんて最後に行ったのは二十歳の頃だ。あの時は私と奈々、夏海、そして今は結婚して東京に居る愛敬りこの四人で行った。

夏と言えば花火。久しぶりに三人で花火に行ける事が嬉しかった。後は愛敬

りがいれば完璧だけど、忙しくてなかなか札幌には戻って来られない。四人揃うのは、まあ無理か。

そんな事はともかく、来週の日曜日は裕太と花火をする約束がある。でも当然、裕太と昔からの親友なら親友を取る。

夏海はすぐに返事をした。

「良いよ。スケジュール空けとく」

私は首を縦に振り、言った。

「楽しみにしてる」

職なしの人間にとって、友達が世間でビッグな事をやらかすのは十分な事件だ。そしてガキの頃からの友達が学校の先生をやっているという事実だけでも、心に穴を開けるには十分な現在進行形の事件に違いない。

気持ちは沈んでいた。更に裕太に悲しいお知らせをしなきゃいけない。

私は友達と花火大会に行く予定が入ったという事を正直に伝え、その上で一つの提案を試してみた。

「私らと一緒に来るか？ 考えてみる。美人なお姉さん三人に囲まれて花火大会行けるんだぞ。もし友達と会ったら超自慢出来るぞ。しかもほら、千瀬奈々って知ってるか。最近オリコンで六位になった千瀬奈々だよ。あいつが来るんだぞ。私の友達だから」

こんな風に奈々をエサにするのは気が引けたけど、なんとかして裕太を喜ばせたかった。でも裕太は喜ばなかった。

「チセナナなんか知らない！ 花火大会は行きたくない！」

「えー……。いや、ちょっと待って。そこそんなに否定する所？ 他の日に花火して、花火大会も行く。どう考えてもこれがベストでしょ？」

私はアパートの駐車場で向かい合っていた。裕太の右手には虫取り網。私の右手には部屋から持ちだしたピンク色の扇子。今日は死ぬほど暑く、マジやっぺらない時間がゆっくり流れている。

「だって！」

「だって、なに？」

「バカにされるじゃん！」

「は？」

「友達以外の人と花火大会に行ったら！ バカにされるじゃん！」

「そ、そうかあ？ むしろああ裕太には友達が居たんだなって見直されるんじゃないの？」

「バカナコ！」

「おいコラ」

「クラスに友達居ないと！ 意味無いんだよ！」

「……」

「クラスの友達と花火大会行けないなら！ 僕は絶対行きたくない！」

分からないでもない。ただ、完全に理解する事は出来なかった。裕太の理屈は一応理解しようと思えば出来るけど、納得は出来ない。

そこまで意地を張る必要があるの？ 分かんない。分かんないけど……。

ああ、そうか。

友達が居ない訳じゃなくて……。

いじめられてるのか。

それでも私は夏海たちとの約束を譲る訳にもいかず、かと言ってハッキリと裕太と花火をする約束を断る事なく、結局花火大会の当日を迎えてしまった。

そして、最悪な事件が起きた。さあ花火大会と言えばなんでしょう！ そう、雨ですね！ って事で朝から天気が悪くて雨が降ったり止んだりを繰り返していた訳。それでも私は一応浴衣を着てみたんだけど、出発の時間には大雨になっていた。残念。

奈々と夏海とスカイプ通話で話し合い、この天気じゃ中止にならなかったとしても、楽しく花火を見るのは無理だろうって事になった。そして奈々が代わりに居酒屋にでも行こうって誘ってくれたけど、私は断った。

私が断った事に奈々と夏海は驚いていたけど、適当な理由を言ってごまかした。でも私らは死んでも友達だ。なんとなく私の態度で何か察してくれたらしく、特に追求はされなかった。

スカイプ通話を終えて、隣の部屋のインターホンを押した。この天気じゃ花火大会はもちろん手持ち花火も出来ないけど、今日は浴衣の相手をするべきだと思ったから。こんな事もあるうかと一応花火は買っておいた。

「……出ねえな」

私は花火セットを抱えながら何度かインターホンを押したけど出なかった。留守らしい。って事は親と一緒にご飯でも食べに行っただけかな。

「うっわ。アホらし……」

ダブルブッキングをしたかと思えば、結局両方の予定が無くなった。なんだこの運命。やっぱ職なしだところこういう疫病神じみた運の悪さがついて回るんだろうか。

ため息をつき、私は自分の部屋に戻った。でも着替える気も失せて、ただぼんやり天井を眺めていた。虚しかった。

虚しい。ただただ虚しい。職なしも、雨も、夏も、何もかも。

改めて思う。なんで私は仕事を辞めたくなくなったんだろう。未だに分からない。でも一つ気がついた。仕事をしている間、私は漠然と虚しかった。仕事で一日を消化するだけの日々が、悲しかった。だからそういう世界から抜け出したかった。一度仕事を辞めてしまえば、何かが変わると思った。でも実際は虚しさが増したただけだった。

もしかしたら人生は、こんなものなのかもしれない。
今にして、そんな事を考える。

雨が止み、私はアパートの裏庭に座り込んだ。いや外壁と金網の間にある小さなスペースを庭と呼べるのかどうか分からないけど、とにかく私はこの空間で何故か花火をしていた。

そして、耳を済ませていた。ドーン！ ドーン！ 花火の音？ そんな訳ないよ。だって今日は花火大会、中止だもん。今はもう深夜。夜空は無音で、ただ虫の音が聞こえるだけ。

音だけじゃなく、夜空に打ち上がる花火も想像した。自分が線香花火をやっている姿も想像した。もちろん浴衣姿で。

妄想の中の私は儂げだった。狭い空間に座り込み、浴衣姿で線香花火をしながら打ち上げ花火を眺めてる。でも実際の私はTシャツにショートパンツ。手にはビール。口にはタバコ。

理想だ。考えるだけでなんかこう、夏っぽい。だって浴衣姿でさ、一人で線香花火だよ。なんか絵になるじゃん。そういうワンシーン、なんか好き。

でも。そんな理想を思えば思うほど虚しくなる。

「……あ」

気づいた。いや忘れてた。

理想を追えば虚しくなる。

そんな当たり前の事に、私は気づいた。

夏。理想が詰まった夏。色んな思いが駆け巡る夏。かけがえのない思い出が眠る夏。

それは、幻の世界のお話だ。
でも。

奈々も夏海も、理想の中に居るんじゃないだろうか。オリコン六位に入るとか、教師生活で奮闘するとか。

私はただ漠然と仕事をしていた。さすがにそれじゃあ、理想の欠片も手に入れない。

「……秋になったら」

また、頑張ろうって思う。

些細な問題だ。ちよつと人生に詰まって、またちよつとした事に気がついた。理想は虚しい。でも、理想を忘れる事は、もっと虚しいんだ。